

令和7年度一般選抜個別学力検査【後期日程】「国語」

I (配点 135 点) 出典：津村記久子「ブラックボックス」

「私」は同僚の「田上さん」を、女性社員を低く見てくる男性社員や年配社員を仕事そのもので裁く人と見なしてきたが、「河谷君」とのやりとりを見、そして「田上さん」のノートを見、実はそうではなかったという背景を知る。このように「私」ができごとを語っている場合、語られている「田上さん」や「河谷君」は「私」というフィルターを経た「田上さん」であり「河谷君」である。その構造を飛びこえて、「田上さんとはこういう人だ」「河谷君はこう思っていたのだ」とは言えないし、設問もまた、「私」が語っていることに留意して考えてほしいという問い方をしている。設問の問うているところを間違えないように。

なお、「田上さん」を「田辺さん」、「河谷君」を「河上君」「河内君」「河田君」「河合君」「水谷君」とする誤記が多く見られた。注意されたし。

問一 A 慎重 B 変哲 C 妥当 D 墓穴 E 首尾

書き取り問題。A「慎重」の「重」において、7画目が2画目の横棒を突き抜けていないものが散見された。また、E「首尾」を「守備」と書いているものも散見された。

問二 ① あなど ② つちか ③ ゆる（「ゆるめ」も可） ④ ちんじょう
⑤ らいれき

読みを問う問題。いずれも正答率は高かった。

問三 比喻表現を読み解く問題。「お姫様」から推測したのだろう、「自分勝手」「わがまま」などの形容を付した解答が多く見られた。また、「分からないふりをする」という回答も散見されたが、「ふりをする」ということは「分かっているうえで」ということでもあるのだから、文脈と矛盾する。

問四 「田上さん」の「こみいった時間管理」についての「私」の理解を問う問題。p.3「私と同じ仕事をしている」云々で始まる段落からの箇所から考えていくことになるが、傍線部「そのこと」の内実を明らかにしたうえで、「作業の仕上げ時間を長めに言うこと」がどのような意味を持つと「私」は考えたかを答えよう。なお、設問は「私」がそのように認識するに至った経緯を問うているのであって、「田上さん」を主語にしての、彼女の認識のあり方を問うたものではない。

問五 「田上さん」に対する「私」の理解を問う問題。(a)はp.4の2・3段落目から考える。(b)は、pp.4-5の3・4段落目から考える。「田上さん」が「社員に嫌がらせをしている」や「社員を苦しめようとしている」といった解答が多かったが、ここも問四と同様、問うているのは「田上さん」の態度それ自体ではなく、「田上さん」に対する「私」の認識である。

問六 「私」が「田上さん」や「河谷君」に対してどのような「役割」を求めていたかを問う問題。傍線部「卑しい悦び」から三行前にある「心のどこかでほくそ笑む」に気づけば、私の「卑しい悦び」の内実を考えることができる。ただし、ここで注意しなければならないのは、「私」は「どちらにもダーティな役割を期待」(p.7)していたということである。問六ではその「役割」が何なのかを問うてもいるのだが、この箇所気づいたと思われる回答は少なかった。

問七 「田上さん」や「河谷君」に求めていた「役割」が「私のわがまま」であったことが明らかになる場面である。傍線部「二人ともに」とあるのだから、「河谷君」だけでなく、「田上さん」の対応についても考える必要がある。「私」が「取り残されたような気分」になったのは、「私」の理解が及ばない事態が目の前で繰りひろげられていったからだが、それは、「田上さん」が自身の指針どおりに対応したということでもある。ゆえに、ここは「誠実」をキーワードに考えてほしいところ。

問八 どのような性質のノートでどのような内容なのかをまとめたうえで、「首を捻る」(納得しかねる、など)の意味を考える。他人の秘密を盗み見る罪悪感にとらわれたためとか、二人が社員として成長していたのに対して私だけが成長していないことに気づいたため、などといった解答が多かったが、はたしてそのように行儀の良い内容であったのだろうか。「なんのことはない」など、「私」が「ノート」をどのような表現で語っているかに注目しよう。

Ⅱ (配点 90 点) 出典：上田秋成「難波津の記」

江戸時代の文人上田秋成が奈良・吉野を訪れた際に記した紀行文の一節である。「紀行文」とあるから、旅の道中の感興を気ままに書き綴っていくスタイルの文章を予想したかもし

れないが、吉野の歴史や文学についての深い造詣を背景に、きわめて知的で批評性に富む内容となっている。そこにうかがわれる秋成独特のものの見方を捉えることが求められている問題である。

問一 基本的な古語についての知識を問う問題。4問中2問正解というパターンが多かったが、基本単語を正確に覚えて、3問以上正解することが望ましい。

問二 筆者がなぜ「さうざうし」と残念に思ったかを答える問題。直前の傍線部分を訳しただけでは不十分で、満点にはならない。「瀧桜といふを」とあるように、咲き誇る桜をイメージさせる地名とすでに桜が散ってしまった現実とのギャップに筆者が注目していることを読み取ってほしい。これは文章全体のテーマにも関わる。

問三 「雲居」の二つの意味のうち、宮中、内裏の意の方は、おおむねよく答えられていた。一方の、雲のかかっているような高い山上、すなわち吉野の山奥の意は、ほとんど解答できていなかった。下句は「ただかりそめの宿と思ふに」の助詞「に」を逆接で取ることがポイントである。一文字であっても、決しておろそかにせず、きちんと訳出することを心がけてほしい。

問四 正答率の低かった問題。「聞こしめす」「あらせん」の主語が後醍醐天皇であることが捉えられていないものは、点数が出なかった。また、文法的には、「むには」を仮定で取ることができていないものが多く、これも点数に結びつかなかった。助動詞「む」の仮定の用法については、昨年度も出題されていたのだから、過去問はしっかりクリアした上で入試に臨んでほしい。

問五 (a) 傍線部分の前の「子守の杜」から「言ふよ」までを簡潔にまとめてあればよい。直前の「神にてませば」から「おはすれ」の部分を入れると減点となる。指示語の指すところを過不足なく取り出すことが重要。よく出来ていた。

(b) 「片笑み」だから、単に面白おかしく思っているのではない。世間の俗説に対して、冷笑、嘲笑、軽蔑といった態度を示していることを捉える。(a)よりは、正答率は低くなった。ここが正解できるかどうかで、読解力の有無が、ある程度わかる。

問六 (a)「言(こと)」と「物」との区別が理解できていれば解ける。おおむねよく出来ていた。

(b) 名(ことば)と事物との対応について、筆者が一貫して興味を抱いていたことを踏まえて答える。ここでは、名(ことば)にあわせて根拠となる物を捏造することに対し、筆者は批判を述べている。「心無き者」は、第一には、情趣を解さない者という意だが、ここは、それでは意味が通らない。文脈を考えれば、分別の無い者の意であることがわかるはず。単語の基本的な意味を覚えた上で、文脈に応じて最適な意味を考える応用力が問われている。解答を十分に記述することじたいが出来ていないものが目立った。

Ⅲ (配点 75 点) 出典：応劭『風俗通義』

不遇に陥った友人に対して、最初は手厚くもてなそうと思っていたのに、そうすることで自分にも累が及ぶかもしれないと思い、態度をかえて冷遇したところ、のちに友人が国の重鎮と称されるほど評価され出世したため、自分の行いを恥じた、という話。複数の人物が登場するが、「誰が」、「誰に」、「何を」を正しく読み取ってから、その行動の意図や理由を考え、全体の内容を理解してほしい。

問一 a ために b よりて c また

基本的な読みの問題。正答率は高かったが、aを「なして」とする誤答がやや多かった。

問二 (a) は書き下しの問題。たとえば「矩敢へ(え)て郷里に還らず」のように書き下してあればよい。正答率は高かった。(b) は内容把握の問題。郷里に帰れない(帰りたくない)ため、友人の環玉都を頼ったのである。傍線部直前の部分が何を意味するのがポイント。

問三 解釈の問題。「何」の反問用法と「宜」の意味を組み合わせ、かつ、「其主」の意味するところを説明してあればよい。「其」が指示するものを読み取れず、「劉矩を(国の)トップにしたほうがよい(または、すべきでない)」とする誤答が多かった。

問四 現代語訳の問題。「如此」の内容の示しかたは、傍線部直前部分の直訳でも、概括的な説明でもよい。たとえば、「暑いときは蒸されるように暑く、寒いときは凍えるよう

に寒く、飢えたり渴いたりする生活が一年続いた」のように訳してもよいし、「冷遇され、粗末な扱いを受ける苦しい生活が一年続いた」のように訳してもよい。

問五 内容把握の問題。まず「梁冀の態度の変化」であることをおさえて、それがどのような変化であるか、本文全体から導いてあればよい。傍線部直後の部分と「厚」との関係がわかれば、「薄」がどのようなことかも導くことができる。「梁冀」ではなく「後漢の政治家」のように書いたものがままた見られたが、文中に名前が明示されている人物を「政治家」という一般名詞で指すことは適切でないため、減点した。

問六 内容把握の問題。劉矩の立場の変化と、玉都の劉矩に対する気持ちや態度の変化を踏まえて、「自らの劉矩に対する行いや考えを恥じて悔いた」という方向で書いてあればよい。「劉矩が尚書令（または国光鎮）になったことを恥じて悔いた」のような解答がみられたが、「慙悔」の主語は直前の「玉都」であり、他人の、しかも名誉なことに対して「慙悔」したとするのは適切でない。